

村上春樹への批判

五十嵐 勉

——カタルーニャ国際賞受賞スピーチを通して——

最近、ふとしたことから村上春樹がカタルーニャ国際賞を受賞したときのスピーチを読む機会があった。

そのスピーチの中になんか気になる批判すべきことがあったので、それについて書いておきたい。

村上春樹は、このスピーチで、東日本大震災のことから、津波で破壊された福島原子力発電所に触れ、さらに日本はアメリカによって原子爆弾を落とされた唯一の被爆国であるということに話を巡らせていく。

その段で、こういう言葉を述べている。

「広島にある原爆死没者慰霊碑には、このような言葉が刻まれています。

『安らかに眠って下さい 過ちは 繰返しませぬから』

素晴らしい言葉です。

私たちは被害者であると同時に、加害者でもあるということそれは意味しています」

この「安らかに眠って下さい 過ちは 繰返しませぬから」という言葉は、慰霊碑に刻まれて公開された当初、被

爆者たちから大きな反発が湧き起こった。それは「だがが過ちを犯したのか」「我々が犯したのではない」「原爆はアメリカが落としたのであって、我々が落としたのではない」「なぜ落とされた我々が過ちを繰り返さないと言わなければならないのか」と落とされた側としての怒りが込められていた。この事実をまったく顧みずに、そのまま「素晴らしい言葉」として表出しているのは、大きな欺瞞を感じる。

また、この言葉を通して、それ以後のわれわれ日本人全体が加害者でもあるように言うのは、飛躍であり、言いすぎだろう。確かに一般の人は、東京電力の予防策に無関心だったし、それを是正する方策も取らず、反対運動も大きくならなかった。しかしそれは、大多数の国民が「そういうことを知らなかった」「知らなかった」と言うべきで、その無知をそのまま加害者として責められる立場に代えられるのも、納得できることではない。通産省関連に原子力委員会があり、その統括の下に、東京電力など諸々の電力会社があり、さらに原子力発電所を作る企業があり、また宣伝用の企業など大きな企業体として「原子力村」が存在

することなど、事故が起こってやっと知ることのできた事実だった。また戦後ずっと原水爆禁止運動に関わってきた人々もいる。阻止を実現できなかった彼らも加害者だと言うのだろうか。反対運動に身を投じてきた人々を前にして、「加害者」だと糾弾できるのだろうか。

確かにそれを知らせなかったマスコミの罪も大きく、これもまた加害者だということになるのかもしれない。そう言い切るのは簡単だが、それもまた当を得ていないように思われる。作家の断罪の構図は簡単だが、むしろそういう象徴的に言い切る言葉が、あまりに現実から離れていて、実現化の道を示していない。その乖離自体も、現実の解決への道を見えなくしているのではないか。

またこういう見方をするのに関連するが、次のような部分も、村上春樹の勝手な浅い解釈のように思える。

「ロバート・オッペンハイマー博士は第二次世界大戦中、原爆開発の中心になった人ですが、彼は原子爆弾が広島と長崎に与えた惨状を知り大きなショックを受けました。そして、トルーマン大統領に向かってこう言ったそうです。

『大統領、私の両手は血に塗れています』
トルーマン大統領は綺麗に折り畳まれた白いハンカチをポケットから取り出し言いました。

『これで拭きたまえ』

しかし、言うまでもないことですが、それだけの血で血を拭えるような清潔なハンカチなど、この世界のどこを探してもありません。」

オッペンハイマーが涙を流して後悔を訴えたときの、このトルーマンの態度は、冷たい突き放しとして受け取られることが多いが、トルーマンの真意をそう受け取ること自体、誤った方向へ向かうように思われる。

大統領トルーマンは、オッペンハイマーの落涙を見て、ただ突き放し、切り捨てようとしたのではない。むしろそれ以上に、「投下したのは私だ」と言いたかったはずである。「開発したのは君たちだが、その原爆を投下したのは私であり、たくさんの無辜の人々を殺したのは私だ」と無言のうち、自分自身の責任と罪を自覚した。ポツダム宣言を発して予定通り原爆を投下した後も、日が経つとともにその悲惨な破壊状態が報告されるにつけ、それを投下したことの重大な責任と後悔が日増しに大きくなっていった。それは苦悩として、彼の中に膨張し、取り返しつかない後悔の刃が鋭く突き刺さっていただろう。

ルーズベルトの急死から大統領に就任したばかりのトルーマンは、当時、外交経験がまったくなく、ポツダムというドイツ郊外での会議に出て、スターリン、チャーチル

というヨーロッパの大物と戦後処理の交渉をしなければならなかった。ごり押しのスターリンとの交渉の切り札に、原爆を使わざるを得ない事情があった。しかしポツダム宣言とのセットでそれを使用して、はじめて、その破壊力の巨大さが、あまりに悲惨で危険であり、人類の破滅を招くことを実感した。その後悔と苦悩は、月日が経ち、原爆の惨状を報告されるにつれ、いっそう深くなった。原爆はただたんに戦争の兵器として考える以上に、人類を破滅させ、歴史を途絶えさせるものとして、大きく考えねばならない——その重大性がのしかかってきた。やがて原爆をソ連が開発するに及んで、危険はいっそう増大し、ポツダムでのあのときの判断が正しかったか、悩みを深めるようになった。状況は、原爆の開発からさらに進み、もっと破壊力の大きい水爆の開発に取りからねばならないところまで来ていた。

そういう世界政治と歴史の圧力の中で苦悩を深めていたとき、オッペンハイマーに接して、トルーマンはどう処すればよかったのか。原爆投下を命じたのは自分であって、その責任は自分にある。あなたの後悔はわかるが、すでにこの世にできてしまったものに対して、どうすればいいのか、私の苦悩はもっと深く、もっと差し迫っている。あなた以上に、もっと後悔し、責任を感じ、悩みを深めている、と言いたかったはずである。

わざわざハンカチを渡す必要もない。他に重大な話をしようとしていたのなら、「今は話せないからまたあとで話をしよう」ととりあえず室から出ていってもらうことも、忙しい大統領の仕事からすれば、考えられる。

このように、隠れた心理、隠れた状況に目を向けず、ただ表面的に取られた態度だけを取り上げて「血を拭えるような清潔なハンカチは世界のどこを探してもない」と非難するのは、見当違いというべきだろう。浅い認識の上に、世界歴史を判じ、問題の本質を見えなくする過誤を犯している。

村上春樹の小説や他の作品には、こうした問題の本質や重大性を捨象してしまつて、簡単に飛びつきやすいこざれいなものに置き換えてしまう傾向が見られる。問題がそこにありそうにチラチラ垣間見えるのだが、それはけっして本質に迫っていかず、食べやすい、読みやすい、楽しみの色として、粉飾されていく。真剣に考えることを強要しない。抽象化によって問題をむしろ楽しみのファッションで被つて、美しく見せてしまう。あるいは興味の連環の中で頼みさせてしまう。それはそれで楽しんでいいのだろうか、ただ原爆や原子力発電のような重大な問題を帯びるとき、本質を素通りして、おいしい部分だけを飲み込み、それですべてが食され、済んでしまうような、危険な透過がある。

ただ、一つだけトルーマンが心に決めていたことは、「もう絶対に原爆は使わない」ということである。

トルーマンを国会議員にして国政に送り込んだ恩人のバーンズが原爆使用をチラつかせてヨーロッパの政界を牛耳ろうとしたとき、トルーマンは容赦なく国務長官の彼を切ったし、朝鮮戦争でマッカーサーが中共の参戦で旗色が悪くなった状況で「原爆を使え」と強く要請してきたとき、トルーマンは断固としてそれを拒否した。そればかりか、マッカーサーを連合軍最高司令官から罷免した。もともと、朝鮮戦争を中共と北朝鮮にそのかしたとき、スターリンの頭の中にあつたのは「アメリカは原爆を使用するか」ということである。もしあのときマッカーサーの要請を受けて原爆使用に踏み切ったとしたら、第三次世界大戦は避けられなかっただろうし、原爆を戦争で使うことによる乱脈な戦いが横行するようになっていただろう。それに留まらず、人類滅亡の扉が開かれていたかもしれない。しかしトルーマンはそれをしなかった。それは自身が日本に原爆を投下したという、深い後悔があつたからである。

こう推量してくると、トルーマンがオッペンハイマーに会ったとき、後悔で嘆くオッペンハイマーにハンカチを渡してこれで拭くように促したのは、突き放すということではなく、むしろその後悔は私も同じであるという、共感と慰めの意味にも取れる。もしほんとうに突き放すのなら、

彼の作品にはつねに隔靴搔痒の感が付きまとう。むしろそのもどかしさとして存在するものを、きれいなもの、とつきやすい飲みやすいもの、清涼飲料水のような味に変えて、快く飲み込ませる。問題を消化しないうまま、通過したような気持ちにさせる。おいしい味を添えて、いかにも考え、わかつたような気持ちにさせる。そのすり替えにまやかしかがあり、危険がある。

原爆をはじめとする核の問題は、ふつうではなかなかわからない多くの知識を必要とする。抽象化では迫れない、複雑な問題が絡まり合っている。しかしまた、現代が抱えている問題として、避けては通れないものを孕んでいる。

抽象化され矮小化された認識や言葉に、欺かれないように、しっかりと自身の中に問題を深めていく姿勢が必要だろう。



戯曲「核の信託」 1000 円
注文はアジア文化社まで